

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
135
2017.7

公益財団法人PHD協会
2017年度会報135号



MIS MUALLIMIN TABEK

「地域の子どもたちのために小学校をつくりたい」

インドネシア・西スマトラ州 タベ村

託された想い ～デフィさんとMISタベ小学校～

Contents

目次

- P.2-4 PHD35期研修生紹介 (2017年度)
- P.5-7 **PHD Movement** vol.18
 P5-6 託された想い ～デフィさんとMISタベ小学校～
 P7 訃報：2015年度短期研修生アイニスマルさん
- P.8 **PHD SAVE NEPAL** ネパール大地震被災地支援報告
 「住民参加型地域調査と計画づくり」
- P.9 新入職員・20期国内研修生 (2017年度) 紹介
- P.10 ローターリー米山記念奨学会
- P.10 日々是東奔西走
- P.11 PHD経由のひとVol.4 柳下 恵子さん
- P.12 タイ・ツアー報告 (2016年度)
- P.13 2017年度事業方針・計画
- P.14 PHD活動紹介 2017年3月～6月
- P.15 PHDNews

PHD LETTER Volume.135



PHD35期研修生紹介 (2017年度)

前田 千春=文

ミスラ・マヤ・タマン

ネパール / 18歳

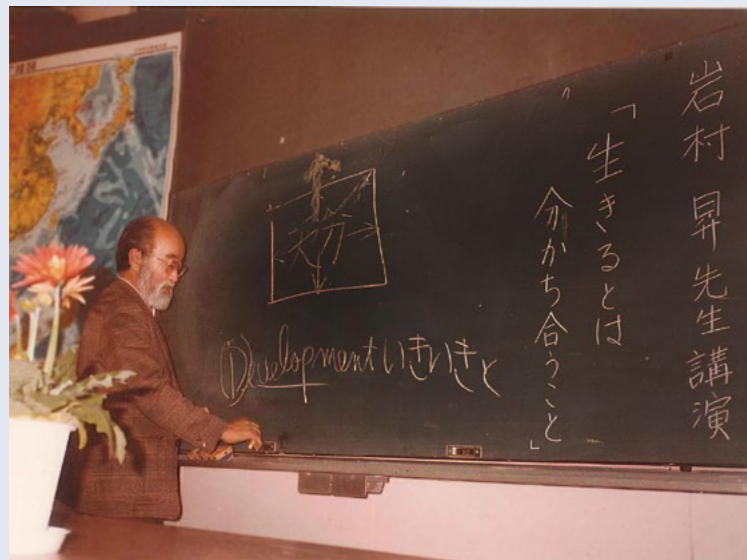


～金持ちより心持ち～

温故知新 岩村語録 その10

「日本人は物持ち、金持ちになったが、弱肉強食の論理がはびこっている。これから大事なのは『心持ち』だ」(出典不明)

出典不明だが、おそらく今から30年前後前の岩村先生の言葉だと思われる。残念ながら岩村先生が指摘された「これから」はまだ実現できていないようだ。「心持ち」、研修生や村の人たちと接していると強く感じる。学び、実践していきたい。(さ)



PHD運動提唱者岩村昇先生の講演



PEACE, HEALTH&HUMAN DEVELOPMENT

公益財団法人PHD協会

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分だけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめて、共に生きる社会をめざし、1981年からはじまりました。

PHD LETTER 135号

発行：公益財団法人PHD協会
 住所：〒650-0003 神戸市中央区
 山本通4丁目2-12 山手タワーズ601
 電話：078-414-7750
 FAX：078-414-7611
 E-mail：info@phd-kobe.org
 URL：http://www.phd-kobe.org
 郵便振替口座：公益財団法人PHD協会
 01110-6-29688

首 都カトマンズから南東にバスと徒歩で約6時間かかるタクレ村から、カンチさんに続いての研修生です。2015年の大地震を経験後、現地NGO「SAGUN」の復興のための住民参加型基礎調査に参加。ムクさん、カンチさんと一緒に苦労しながら村の人たちの声を集める役割を担い、周囲から高く評価されました。その経験から「地域を良くしていくには関係性づくりが大事」と感じています。

研修生の中では最年少ながら、みんなに気を配ったり、電車の乗り方をすぐに覚えたりと、みんなのお姉さん的な存在です。それもこれもミスラさん曰くとても厳しいお父さんに育てられたからでしょうか。

ミスラさんの研修したいこと

保育・幼児教育

地域には保育園がなく、幼い子どもを持つ親は1時間かけて保育園に連れて行き、そのまま付き添わなければならないため、

仕事ができない。日本で保育や幼児教育全般について学び、地域で子どもたちの面倒をみられる存在になりたい。

保健衛生 (健康管理)

地域には結核や喘息の人が多く、病院や診療所がないので、重症・重病人はマンガルタールなど都市の病院まで運ばれる。日本で病気の予防法や応急処置などについて学び、地域の人たちの健康につなげたい。

洋裁

地域に洋裁が出来る人がおらず、服を買う場合は1時間かけて村の中心部に行かなければならない。洋裁の勉強をして、地域内で服を作れるようになりたい。

農業

母の農業を手伝い、トウモロコシやからし菜などを栽培している。作物の栽培方法や農産物の販売システムを日本で学び、地域の農業に活かしたい。



滞在家族 /

猪上 通恵さん

今日はミスラさんが2週間ぶりに我が家に帰りました。彼女は食事を食べたかしら、もう起きたかしら、と心配しましたが、あっという間の2週間でした。笑顔で「ただいま」と少しはにかんで帰ってきたら、よく会話が出来るようになっていて、驚きました。また、4～5日すると研修とか…。一段と成長して帰ってきてくれるでしょう。

もう我が子と一緒にかも…。彼女は一日一日、日本の生活を自分のものにしていくのに関心しています。日本の良いところを身につけてほしいものです。



PH 35期研修生紹介 (2017年度)

タンタンミエ

ミャンマー / 20歳

シ ャン州から初めての招へいです。古都マンダレーから車で約3時間、コンブン村の出身です。父は退役軍人で、国境での内戦で地雷を踏み義足生活を送っています。村では経済的な事情から学校を辞めて働かないといけない子どもが多く、タンタンミエさんも両親を支えるために高校を中退し、現在は農業の小作人として働いています。農業研修では有機農業で作った野菜が大きいことにビックリ。「植え付けや栽培方法についてしっかり勉強して、ミャンマーで大きいタマネギを作りたい」と意気込んでいます。

タンタンミエさんの研修したいこと

農業

小作農としてタマネギとトウモロコシを栽



培しているが、化学肥料等を使わず鶏糞を使用しているため、作物が小さいのが課題。帰国後は自分の農地でタマネギやニンニクを作って、販売もしたい。そのため、作物を大きく育てる有機農業を学びたい。自分の農業が軌道に乗ったら、村の人たちにも教えたい。

保育

小学校に入る前にしっかり勉強をしないと、文字が書けず、勉強についていけなくなり、結果として児童労働へと繋がってしまう。村の保育園で先生の補助として子どもたちに勉強を教え、小学校を中退する子を減らしたい。

保健衛生

村には高血圧や糖尿病の人が多く、村の人たちに生活習慣病の予防法を教え、健康につなげたい。

洋裁

村内では民族衣装を買うことが出来ず、遠い町まで買いに行かなければならない。民族衣装を自分で作れるようになりたい。



滞在家族 /

宝田 和正さん てるみさん

日本に來られて2カ月、だいぶ日本語も通じるようになってきました。これも毎日勉強して、更に夜遅くまで復習しているからだと思います。月曜日から土曜日まで6時頃帰ってきますが、かなり疲れている様です。

今、我が家もじゃがいも、たまねぎ、きゅうり、キャベツ、ナスと収穫がありますが、「ミャンマーではもっと小さいです、きゅうりももっと大きいです。」と話しながら、野菜ばかりの食事をしています。これは中華、これはイタリアン、これは韓国など、各国の料理を楽しんでくれています。ミャンマーにはカレーがなく、一番好きだと言っています。

忙しい時は、掃除、洗濯干し、農作業なども手伝ってくれて助かります。これからも色々なことを見て、経験して、勉強してもらいたいです。



PH 35期研修生紹介 (2017年度)

マリア シルヴィアナ デフィ

インドネシア / 28歳

多 くの研修生を招へいしてきた西スマトラ州ソロ郡タベ村の出身です。10人兄弟の5番目、父は大工兼、呪術師で家は売店を経営。日々家族の手伝いで忙しくしています。大学でイスラムを勉強し、現在はMISタベ小学校で先生として勤務し、一年生を担当しています。教師として子ども達の虫歯、下痢、皮膚疾患が多いこと、ゴミ問題が気になっています。帰国後は「健康で清潔な学校を作りたい」、そして中長期的な視点で村を良くすることが目標です。

小学校と保育園での研修では給食に着目。自身の小学校には給食はなく、「子どもたちはお昼に好きなお菓子や揚げ物を買って食べる。給食には野菜もお肉も入っていて子どもたちの体に良い。」と興味津々です。



デフィさんの研修したいこと

小学校教育

小学校や幼稚園の先生の教え方、特に視覚教材などを使用した授業手法を、全ての教科を対象に学びたい。また、先生方の授業の準備や、授業前の学年会議なども見学したい。

ゴミ問題

小学校では紙くずやプラスチックなど、毎日大量のゴミが出る。これらは全て焼いて処分しており、環境問題や子どもの健康問題へと繋がっているため、日本でゴミ処理の方法を勉強したい。

子どもたちの健康

保健室の業務、手洗い・歯みがきの指導、子どもの栄養を考慮した給食について勉強し、村で小学生に教えたい。

洋裁

教員としての所得が少ないため、簡単な洋裁技術を習得して、副収入を得たい。



滞在家族 /

黒野 美代子さん

食が細いということで心配しましたが、お魚、卵、鶏肉、野菜と思いのほか食べてくれています。とても辛い唐辛子を入れてですが、食事の後は食器洗い。それが終わると、床の掃除までしてくれます。「もういいから勉強をして」と言うと、「私はお母さんを助けたいです」と、携帯の翻訳アプリで言ってくれるのです。

何をやるにも一生懸命で、日本語の学習はもちろんのこと、インドネシアの踊りを披露しなければいけない時もYouTubeを使って何度も何度も練習をしていました。これからの研修でもきっと一生懸命頑張ることでしょう。我が家に帰ってきたときには、ホッとできる居場所になるように迎えたいと思います。



MISタベ小学校 朝礼の様子



教壇に立つデフィさん



デフィさんが担任を務めるクラスの児童 (MISタベ小学校)

PHD Movement vol.18

託された想い ～デフィさんとMISタベ小学校～

事務局長 坂西卓郎 = 文
～分かち合い実践録～

インドネシアは成功地域

PHD協会の活動地の中でもインドネシアは成功地域として、他の国の研修生のモデルになっている。具体的には外からの資源に頼らずに自分たちで水道、電気、道路などを整備し、幼稚園、協働組合なども運営している。そして今回紹介する小学校は研修生たちの働きによって建設されたものである。

改めて短期研修生とは？

今回紹介するMISタベは今年の研修生デフィさんが勤める小学校である。その校長先生は2015年度の短期研修生アイニスマル(ニニス)さん。当会の1年間の研修生は長期間の研修を考慮して若い人たちが多くなる傾向にある。将来性豊かなことは良いのだが、場合によっては帰国後にその若さゆえ、認められなかったり、理解されなかったりすることもある。短期研修生はその点を補う側面もあり、地域で既に実績や役割のある方を招き、日本での研修とともにPHD協会の活動や研修生のがんばりや帰国後やろうとしていることを理解し、促

進してもらうことも目的としている。ニニスさんはその目的を十二分に果たしてくれ、現在は強力なサポーターとして研修生たちを支えてくれていた。

MISタベ小学校の歴史

さて、前置きが長くなってしまったが、本題であるMISタベ小学校がどのように作られてきたかニニスさんのレポートから紹介したい。

「1993年時点で小学校はAMPERA CUBADAK GADANGの広場の近くに位置するたったひとつの小学校のみでした。当時、村はタベ村、シランジャイ村、タラタジャラン村(カユジャングイを含む)という3つの地区で構成されていました。小学校の生徒は毎年爆発的に増え全生徒を受け入れることは不可能でした。生徒数は莫大でした。

1999年、私はアラハンパンジャンのD2(2年制専攻科大学)で学びながら、小学校のボランティアとして働いていました。私の勤める小学校を常に観察していました

が、生徒の数は毎年過剰で、設備も建物も教員も適切と言えるものではありませんでした。

そこで、タベ村に新しい学校を作りたいというひとつの思いが浮かびました。何故ならこの地域にはマドラサという形態をとるイスラムの小学校が未だなかったからです。この問いかけは村長に報告されました。そして地元有力者と共に協議にかけられることとなりました。この協議に基づき全地域住民が学校設立に合意しました。そして私は教師となるべく地域と村長から後押しされました。

2000年、MIS MUALLIMIN TABEKという名のひとつの学校がタベ村に誕生しました。設立当初、生徒はたったの26名でした。運営していくにあたり、私達の努力にも関わらず喜びと悲しみは常に付きまといました。中傷もありました。それが人というものなのでしょう。しかし私達は常に耐え忍び、しっかりと前を向きました。そしてこの学校をより良くするために常に会議を繰り返しました。常に努力あるのみでした。

2001年、私はD2を卒業、学校の処理す

べき問題も明らかになり始め、私達は常に学校をより良くするための支援を得るチャンスを探索していました。同時に政府やタランバング地区の校長、地域の富裕層などとも友好関係を築いていました。何故ならこの学校の資本となる寄付金が必要だったからです。

2000年から2005年、速度は遅いものしかし確実に援助は増えていき、より良い考えや指導、資材、教員の増員などの支援を受ける事が出来るようになっていました。また、地域の高校や教育機関を卒業した者からの援助の申し出などもありました。

私は地域の中にあって次第に自信を持てるようになり学校運営のために奔走しました。同じく2005年、私はパダンでSI(学士過程)に入り知識を増やしていきました。学校は進歩し、たくさんの支援も来るようになっていました。地元の信用も得て、政府の承認も得られ、地域は活性化しました。政府からの建物の援助も増えていき、教員も順調に増員されました。タベ村は就学という問題に関して益々努力を惜しまなくなっていました。

その頃には生徒数は150人にもなってい

ました。教員も10名になり全てが順調でした。2006年には既に6年生を修了する生徒があり、学校の成績という点では市や県や、それどころか州においても数多く1位を獲得するようになっていました。

年を追うごとに状況は好転し、現在では生徒数は200人前後にもなり、教員は16名になりました。そして11の教室、図書館、教員用のトイレ2つ、生徒用のトイレ2つ、礼拝堂、宗教室、校長室、講堂までを有しています。将来的に益々レベルを上げて行けるよう願ってやみません。」

アイニスマル 翻訳 濱宏子

そして想いはデフィさんへ

上記のレポートを読むと順風満帆のようだが、特に設立当時は苦労も多かったと言う。校舎も今は写真の通り立派であるが、最初は一見しただけでは学校に見えないような粗末な建物であった。そこからアイニスマルさん、そして夫でもあるタベ村村長のアフダールさん(2000年度研修生)、現在は地域の役場で働くミミさん(2002年度)、地方議会議員選挙に出馬するように

なったダスウィルさん(1999年度)、小学校の制服を得意な洋裁で設えてきたエリさん(2003年度)たちが支えながら文中にもあるように州レベルで評価されるまでになった。

デフィさんはそんな小学校を代表して、若手の有望株として押し出されて日本に来た。これまで農業や保健衛生が中心であり、そちらが一定程度の成果を上げたからこそ、教育に至ることができた。今までの積み重ねを感じるとともにPHD協会としては「教育」という分野での新たなチャレンジとなる。MISタベも順調な学校運営のようだが、「貧困世帯の課題や下痢や虫歯などの健康問題、ゴミ問題などがあり、勉強に集中できない子ども達も居る」とデフィさんは語る。MISタベの次世代を担うデフィさんの日本での研修に皆さんのご協力をお願いしたい。

※本原稿を書き上げた翌日ニニスさんの訃報が飛び込んできました。次頁で報告させていただきます。

訃報：2015 年度短期研修生アイニスマルさん

坂西 卓郎=文

アイニスマルさん(通称ニニスさん)が6月9日にお亡くなりになった。享年44才。あまりに早い一生であった。残念ながらTakziahと呼ばれるイスラム教での葬儀にあたる死後3日間のお祈りには間に合わなかったが、訃報を聞き急遽現地を訪問してきた。

ニニスさんは「タバのメガワティ」と呼ばれた女傑で、MISタバ小学校、協同組合の副代表、婦人会会長など、地域の様々な活動で中心的な役割を果たしていた。当会とのつながりは2000年度研修生にしてタバ村村長のアフダールさんのお連れ合いさん、そして小学校訪問や組合、PHDインドネシアなどの活動を陰になり日向になって支えてくれていた。そして、機が熟した2015年度には短期研修生として招へいさせていただいた。経緯は前ページ「PHD Movement vol.18」の通りである。近

親愛なるイブ

真夏の太陽のような笑顔で「あははははは！遅れちゃったわ〜」の第一声と共にPHD短期研修生として関空に降り立ったイブニニス
その出会いから今日まで、過ごした時間は短いのに何故かとても濃い関係を私達は築いた
大人と子供がひとつの身体に宿ったような人だった
堂々とした校長室でのイブと、1人が怖くて眠れないイブ
その大人から子供、子供から大人への変貌がなんとも魅力的で可愛らしく、彼女に関わった人は皆その魅力にやられてしまう
新築のイブの家にホームステイした時、ジルバブ(イスラム教徒のスカーフ)を外した1人の女性として沢山の秘密の話をした
そしてジルバブを被った時は日本の教育の

年は協同組合での社会的投資、JICA草の根技術協力事業で西スマトラ政府との業務締結など、ニニスさん中心で進めていたと言って過言ではない。

一方、その内面は乙女チックなところがあり、「一人では寝れない」と寂しがったり、笑顔で大笑いしたり、お茶目なところが多々あるという大変魅力的な方だった。短期研修生ながら関わっていただいた方には大きな印象を残したと思う。そのニニスさんが今はいないことが信じられない。事業面でも、一人の友人としても喪失感が大きく、いくら時間が経っても埋まりそうにない。

少ない時間しか共にしていない坂西がこうなのだから、当然現地での衝撃は比ではないようだ。2002年度研修生のミミさんのメッセージを紹介したい。
「村中が悲しみに包まれていて、偉大なりー

現場を見て学んだその利点を、自分の学校にそしていずれはインドネシアの教育現場に広めて行こうという情熱を抱えきれないほど持っていたと思う
誰よりも教育現場を愛したイブ
志半ばにしてこの世を去ってしまったイブ、でもその想いは必ず村に引き継がれていくと信じた

3度に1度しか繋がらないタバ村の微弱なインターネットでたくさん電話やメールをして再会を誓っていた私達
最後のメールにも早くママに会いたいと書かれていた
残念で残念で病床を見舞えなかったことが今も悔やまれる

アイニスマルさん(右)と濱宏子さん(中央)
2015年10月 大阪・釜ヶ崎研修にて。
(左:33期インドネシア研修生ゾンさん)

PHD Movement

ダーを失って途方に暮れている。これからどうしたらいいのか。代わりの人がいない」
(翻訳:濱 宏子)

今でも目を閉じれば「ボス!」というニニスさんの声が聞こえてくる。満面の笑顔とともに。Saya turut berduka cita atas meninggal ibu Ninis. (ご冥福をお祈りします) ニニスさんの教育にかける想いはデフィさんと共に継いでいきたいと思えます。だから、安らかにお休みなさい。

BOS Jangui Sakanishi

夫のアフダールさんから

「皆さん心配してくれてありがとう。皆さんの気持ち嬉しかったです。私は寂しいけどね、大丈夫。これからも村長をがんばります。またタバ村に来てくださいね。」

イブ、どうか今はアラーの御許でのんびりとしてください

9月にはイブの大好きな甘いお菓子を持って会いに行きますね

Terimakasihibu Ninis.

2017年6月22日

インドネシア語通訳ボランティア 濱 宏子



ネパール大地震被災地復興支援報告

「住民参加型地域調査と計画づくり」報告

前回134号でこの2年間の取り組みの全体概要を紹介させていただきましたが、今回から個別の活動について報告いたします。今回は今年度の研修生ミスラさんも参加していた「住民参加型地域調査と計画づくり」です。地味な活動ですが、PHD協会の力点を具現化した活動です。
坂西 卓郎=文 八木 純二=「現地からの報告」編集

現地からの報告 住民参加型地域調査と計画づくり

調査の目的と意義

被災者の現状と被災地域に存在している課題について、住民自身が調査を実施します。この調査の実施とともに「調査目的を共有」することが「住民参加型地域調査」の重要な意義となります。

調査員になる資格はマンガルタール地域のすべての世帯(890世帯)が有し、同時にその調査対象となります。また、被災地域の様々な団体、復興支援に関心のある外部の団体もこの地域調査に参加できます。

調査の準備、研修、実施

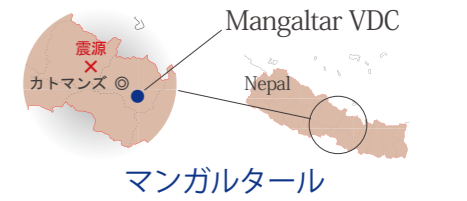
住民参加型地域調査の準備として、調

PHD協会が大切にする 「住民主体」という価値観

PHD協会はネパールの震災復興にあたりマンガルタール地域ではSAGUNというカウンターパートと協力して活動しています。復興のフェーズ(段階)も緊急救援の第1フェーズを終え、生活再建の第2フェーズに入っています。そこで、PHDとSAGUNが重視しているのが「住民自身による復興、生活再建」です。そもそもPHD協会が研修生の招へい事業という一見回りくどい活動をしているのも岩村先生の「住民主体」という想いから来ています。復興にあってもPHDの基本原則である住民主体という軸を大切にしています。

「参加型地域調査と住民自身による計画

PHD SAVE NEPAL



もと、地域の全世帯にインタビューを実施、質問票を用いて必要な情報を収集しました。

調査の成果

住民参加型地域調査の実施により、大地震被災後のマンガルタール地域のデータが収集され、コミュニティの現状が把握できました。地域の住民自身による調査を実施したことの意義は大きく、住民たち自ら復興計画を策定し、実施することへの意欲が高まっています。

この地域復興計画はネパール語で作成され、関係者間で共有されています。また、この地域の復興に関心のある団体や組織に、より広範に共有されるべく、英語版が現在作成されています。

づくり」活動も一見、必要性がわかりにくいかも知れませんが、私たちは住民自身が被災後の調査をし、そしてその事実を基に計画を自分たちで作っていくことが大事だと考えています。このプロセスには時間がかかりますが、外部者が作る見栄えの良い計画よりも地に足の着いた持続性のある計画ができると確信しています。加えてSAGUNはこの住民主体のアプローチに高い専門性を有する団体でもあります。

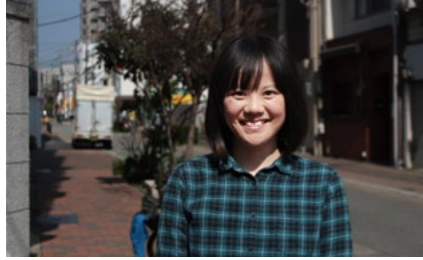
ミスラさんとの出会いもこの活動から

今年度の研修生ミスラさんは来日前、この地域調査に参加し、優秀な成績を収めたそうです。元研修生ムクさん(2014年度

32期)とカンチさん(2015年度33期)の指導を受け、意欲的に調査に取り組みました。ある時、同じ村の女性なのに話をしてくれない方がいたそうです。彼女はそこで諦めずに「まずは関係性を作ろう」と思い、農作業の手伝いをするなどして仲良くなってから話を聞いたそうです。この経験から関係性作りの重要性和楽しさを知り、地域づくりにより興味を持ったとのこと。ミスラさんは村の中でも僻地に住んでおり、カンチさんが住む中心部からは徒歩で約1時間かかります。ボランティアなどに興味があっても、なかなか情報が届かず、その機会に恵まれなかったそうです。しかし、今は地域調査の経験を活かし、自分の地域を良くしたいと具体的に考えることができるようになりました。

PHD SAVE NEPAL

新入職員紹介



前田 千春

研修担当

はじめまして。研修担当職員の前田千春です。

出身は大阪ですが、大学進学のために沖縄に移住し、10年間沖縄でのんびりと暮らしていました。沖縄での大学生活は、講義終わりに近くの海でシュノーケルをしたり、水平線に沈む夕日を眺めたり、休日にはビーチでバーベキューをしたりと、自然に囲まれてとても楽しい毎日でした。

大学院に入ってからインドネシア・ジャワ島の農山村の農林家経済や、森林を利用した貧困対策についての研究をしてきま

した。その中で、豊かな村を作っていくためには、長期的な目線で村や地域のことを考えられるリーダーや若者が必要だということに気づき、PHD協会で研修担当として働くことになりました。

これから研修や交流会を通して、研修生と一緒にたくさんのことを学びたいと思っています。どうぞよろしくお祈りします。

他己紹介

前任の研修担当今里が「自分を越える逸材」と惚れ込み、後を託していったのが前田。期待に違わぬ動きぶりで研修生と共に歩みだしている。個人的に評価しているのは温和そうな見た目には似合わず厳しいこと。この点においては既に前任者を越えたか。伸びしろは特大、素直で吸収も早い。皆さま暖かく厳しくご指導お願いします！

坂西 卓郎

20期国内研修生紹介 (2017年度)

吉村 芙優

研修担当



初めまして、2017年度国内研修生の吉村芙優です。私は大阪女学院大学の4回生で、昨年度の国内研修生、加藤さんの後輩にあたります。大学では国際関係や国際法について研究しています。これらを学ぶ中で、今日の国際協力において重要な役割を担っているNGOの活動について、より近くで学びたいという思いから国内研修生に応募しました。また、昨年の夏にミャンマーのスタディツアーに参加したのですが、そこで加藤さんが研修生と触れ合う姿からも大きな刺激を受けました。それも

国内研修生に挑戦しようと思った理由の一つです。

現在は研修担当として研修生たちのサポートなどを行っています。会うたびに日本語が上達する彼女たちと話すことが日々の楽しみです。本格的な研修が始まりましたが、農業や保育、保健衛生については私も知識がありませんので、研修生たちをサポートしつつ共に学びたいと思っています。1年間どうぞよろしくお祈りします。

他己紹介

とにかく背が高い芙優さん。書類を頼むとすぐに「できました！」と持ってきます。仕事が早いです。研修生の様子もよく見てくれていて逐一報告してくれるので、とても助かります。これから農業研修など研修生と一緒に様々なことに挑戦して欲しいです。

前田 千春

ロータリー米山記念奨学会

2017年度も米山記念奨学生としてPHD協会の研修生3名を受け入れていただきました！

上石 景子=文

◇ 今年度のお世話クラブとカウンセラーの方々 ◇

篠山ロータリークラブ・堀口 純男さん

デフィさん

小野加東ロータリークラブ・富田 悠介さん

ミスラさん

川西ロータリークラブ・上田 邦彦さん

タンタンミエさん

右/篠山ロータリークラブ
左下/小野加東ロータリークラブ
右下/川西ロータリークラブ



篠山ロータリークラブでは、昨年度と同様、インドネシアからの研修生デフィさんがお世話になります。イスラム教の断食(ラマダン)の時期に例会に出席した際には、断食中のデフィさんを見て、皆さん心配していただきました。7月には京都での納涼例会、デフィさんは初めての京都を楽しみしにしています。

小野加東ロータリークラブでは、スリザナさんに続き、2人めのネパールの研修生ミスラさんを受け入れていただきました。5月の例会では、日本語の自己紹介の上手さを褒めていただき、ミスラさんもうれしそうでした。8月の開催の小野まつりにもお誘いいただき、花火やダンス大会など、ミスラさんは今から日本の夏祭りに興味津々なようです。

例年、ミャンマーの研修生を受け入れてくださる川西ロータリークラブでは、今年もタンタンミエさんを迎えていただきました。タンタンミエさんは作っていただいた名刺を配りながら、クラブの皆さんに挨拶をして、今では皆さんに「担々麵」や「ミエちゃん」などと呼ばれ、可愛がっていただいています。また、カウンセラーの上田さんが院長を務める病院に毎月お邪魔して、見学や応急処置の指導などもいただいています。

どのクラブでも例会に参加する度に、クラブの皆さんが研修生に話しかけてくださり、最初は緊張していた研修生たちも回を重ねるごとにリラックスして、会話を楽しんでいます。今年も1年間、よろしくお祈りします！

日々是 東奔西走

研修担当
前田千春

『インドネシア・西ジャワ 滞在経験を通して』

2011年から研究のためにインドネシアの西ジャワで複数の農山村に滞在してきました。人口過密地域である西ジャワの農山村には貧困層が多数存在しており、そのほとんどが無職者や日雇労働者であるなど、貧困から脱却するのが難しい状況にあります。そこで、西ジャワの農山村地域における森林利用を通じた貧困対策の効果について、さらにはアグロフォレストリー技術(樹木を植栽した樹間で農作物を栽培する技術)を私有林に導入した場合の経済波及効果についての研究をしてきました。

その中で対照的な2村がありました。貧困対策として村のリーダーたちが主導してアグロフォレストリーを私有林で導入した結果、農家所得が向上しただけでなく、村に製材所ができ雇用が創出されるなどの経済波及効果も生み出し、資源的にも経済的にも豊かな村がありました。一方で、地域住民が少額

の現金獲得を目的に私有林を中国系企業に売り払った結果、土地を失った多くの地域住民は日雇労働に従事するしかなく、貧困へと陥っている村もありました。

このような経験から、村のリーダーを育てるという活動に少しでも貢献できたらと思い、PHD協会に就職して4ヶ月が経ちました。日々の研修生との会話の中で、元研修生の名前や帰国後の活動についての話がたくさん出ます。村からもほとんど出たことがなかった研修生たちに1年間日本で研修をする原動力を与えたのは、それぞれの村で活躍する元研修生たちです。今年の研修生たちにも村の人たちの何かの原動力になるような村のリーダーになって欲しいと期待しています。



私有林から丸太を運び出す様子。
インドネシア ジャワ島・ボゴール県



左上/1993年8月インドネシア・スタディツアー。西スマトラ州 海岸沿いの漁村パシルパル村近隣の島を訪れるツアー参加者。

右上/1993年8月兵庫県篠山町(現:篠山市)での「草の根生活塾」の様子。「草の根生活塾」は研修生とともに、異国の文化と日本の農村生活を参加者が体験するイベントだった。



PHD経由のひと Vol.4

～柳下 恵子さん～(1993年度～1995年度在職)

PHD経由の人、今まで3人の方にご登場いただきましたが、今回からPHD協会40周年に向けてリレー形式でPHDの歴史を知る人たちにご登場いただこうと思います。その第一号は柳下さんです。多様な方々を繋ぐ結節点として活躍された方で今回に相応しい方に日々の生活でお忙しい中、寄稿いただきました。

坂西 卓郎=編集

「PHDで働いていた頃を振り返って」 柳下(現:兎島) 恵子

こんにちは。PHDに長く携わっている皆様にはご無沙汰のお詫びを、初めての皆様には初めましてのご挨拶を申し上げます。

私がPHDに勤めていたのはもう20年以上前になります。PHDでは個性豊かな研修生、ボランティアさん、指導者さん、職員との出会いや、研修生と出かけた県内の様々な地域や研修旅行で多くを学ばせて

いただきました。途上国の貧困問題への関心がきっかけとなったPHDへの転職でしたが、有機農家の研修指導者との出会いが私にとっては特に貴重な機会だったと思います。海外に目を向けていたのが足元の問題を考えるようになり、自分の暮らしを振り返る契機になりました。しかし次第に研修をどのように村で活かすか悩む研修生たちの役に立てない非力な自分に嫌気がさし、働き始めて3年後に退職しました。PHDを辞めてからは英語を勉強し直し、仕事をしながら休日にNGO関連の通訳や翻訳をしていたこともあります。

今は育児と仕事の両立が難しくパートの仕事をしています。忙しい日々の中、PHDでの学びをなかなか現実の生活で活かせていないのがお恥ずかしい限りです。PHDの元研修生さんたちも研修で学んだ事を生かしたいけれど現実にはそうもいかない、という悩みを抱えている人もいないでしょうか。私が勤めていた時から20年が過ぎ、PHDの研修事業もさらに研修生に寄り添う事業になっていることを願っています。

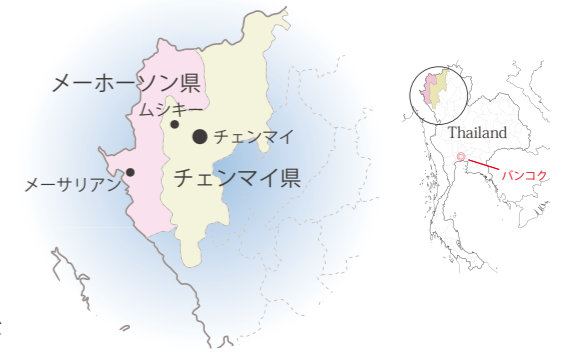
REPORT

第34回タイ・スタディツアー(2016年度)報告

カレンのお母さんグループを訪れる毎年恒例のタイ・スタディツアー。

2017年2月19日～3月1日の日程で行って来ました。

上石 景子=文



女学生ばかりのタイ・ツアー

今年のタイ・スタディツアーの参加者はなんと7名全員が女学生！わいわい騒いだり、夜は語り合ったりと、なかなかフレッシュでエネルギー溢れる旅となりました。村でのホームステイ、フェアトレードコーヒー生産団体や現

地NGOの訪問、子どもたちとの交流、ナイトバザールやエレファントキャンプでの観光、そしておいしいタイ料理……と、内容は盛りだくさんでした。ここでは、「チョディ」と「ルチョコ」の2つの布グループとの交流・買い付けの様子と、仕入れた

布製品の紹介をさせていただきます。もっとPHDのタイ・スタディツアーについて知りたい方は事務局までお問い合わせください。2017年度もタイ・スタディツアーを計画しています。

「ルチョコ」 メーサリアン村

現在15人のメンバーで活動しているルチョコ。布の家を訪れ、ナロンデさん(2001年度研修生)の通訳のもと、インタビューをさせていただきました。ルチョコは地域から優良グループの表彰を受け、政府から布の家を建てる資金を助成されたそう。お母さんたちは布グループの活動を通じて、カレンの伝統を継承していきたいと語ってくれました。



上/ルチョコの新しい布製品。ランチョンマット、ポケット付きの丸かばん、トートバッグ、テーブルセンターなど。



右上/村の女性の手により鮮やかな布が織られていく。右下/ルチョコのお母さんたち。



左上/カレンの伝統「腰織り」の体験。左下/笑いが止まらないスパボンさん。

上/チョディの新しい布製品。ぞうさんのかばん、シードポーチ、シードバッグ、ポンチョなど。

「チョディ」 ムシキー村

ポーディーヤさん(2006年度研修生)がいるチョディでは、ミーティングや布の買い付けの他、腰織りや糸の染色の体験、PLAカレンダー作成、日・タイお菓子作りを通じて交流を深めました。いつも笑っているスパボンさんをはじめ、明るく快活なお母さんたち。布も創意工夫に富み、商品開発のアドバイスや日本での売れ行きについても熱心に耳を傾けてくれました。

2017年度事業方針・計画

方針

「新体制2期目始動。
チャレンジの年に！」

- 2017年度はチャレンジしていく組織文化を育む一年としたい。全体としては次の3点に取り組む。
1. 「財政の安定化」：基本財産の運用収益減を受け、会費や寄付、収益事業の強化、必要に応じて助成金申請などを行い黒字化を達成する。
 2. 「研修事業の充実、成果の視覚化」：研修担当の交代を受け、再度安定した事業実施を目指す。
 3. 「JICA草の根技術協力事業の実施」：インドネシアで牛肥育を通じた収入向上プログラムを実施する。当会研修生が主体となっており、帰国後のフォローアップとして注力する。

同様に各担当の計画にも重点部分をチャレンジとして記載し、成果に向けて挑戦していくことで、「共感と支援を得られる組織作り」を実現していく。

研修事業

35期研修生は昨年に引き続き女性3名。デフィさんは現職の小学校教員であることから教育を中心とした研修を組む。タンタンミエさんは農業と保育を中心とした研修を、ミスラさんは保育と洋裁を中心とした研修を組む予定。

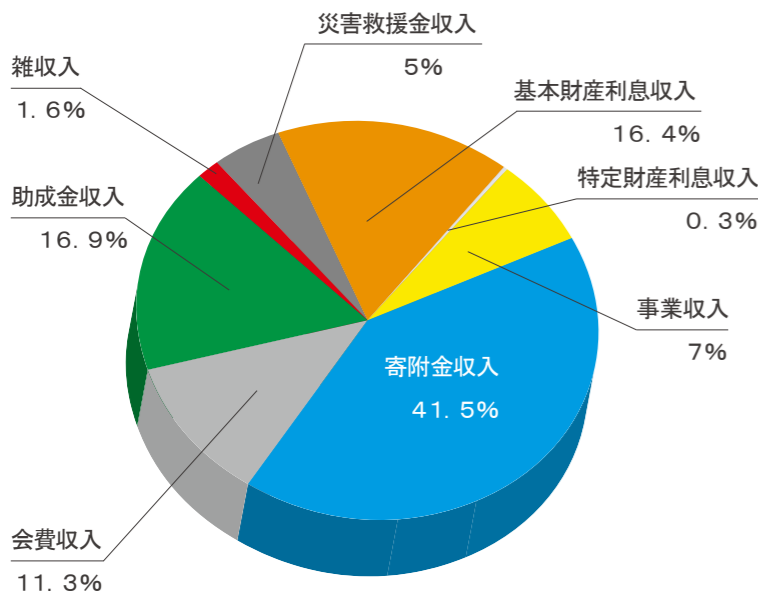
また、各村での様々な健康問題が起きていることから、3名とも保健衛生の研修を希望しているため、歯科・口腔外科や保健センターでの共通研修を実施する。

広報・啓発事業

2017年度は「業務の効率化」を進めていく。効率化により生まれた余力や時間は、PHD協会のより広範な社会認知度の向上や新規支援者の獲得につながるよう、創造的な業務に振り向ける。具体的には次の2点に取り組む。

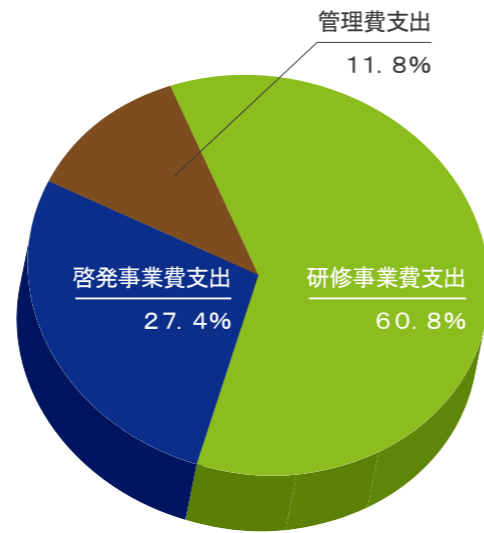
1. 「新しいホームページの制作と立ち上げ」
2. 「新しい支援者層の開拓」

新しいホームページとソーシャルネットワークサービス(SNS)を効果的に連動させて使用し、いままで手薄だった20～40代の支援者の獲得を目指す。



経常収入 30,500,000 円

2017年度 予算



経常支出 30,500,000 円

PHD 活動紹介 2017年3月～2017年6月

3月

- 4日 34期研修生帰国報告会
- 4-5日 国際ロータリー地区大会 (坂西、上石)
- 8日 篠山ロータリークラブ例会 (上石、リンダ)
- 8日 小野加東ロータリークラブ例会 (今里、スリザナ)
- 9日 コープこうべ ネパール地震被災地視察報告会 (坂西)
- 10日 川西ロータリークラブ例会 (上石、ティダチョー)
- 11日 34期研修生お別れ会
- 12日 ロータリー米山記念奨学会歓送会 (上石、リンダ、スリザナ、ティダチョー)
- 14日 関西NGO協議会 理事会 (坂西)
- 14日 大阪女学院大学 タイツアー事後授業 (坂西、上石)
- 15日 34期研修生離日
- 15日 神戸YMCA国際委員会 (坂西)
- 16日 NGO-JICA協議会 (坂西)
- 16日 国際ソロプチミスト姫路西チャリティバザー (上石)
- 17日 JICA事業マネジメント説明会 (坂西、上石、古寺)
- 21日 PHD協会財務委員会 (坂西、上石)
- 22日 定例職員会議
- 23日 コープともしびボランティア復興財団 理事会 (坂西)
- 25日 ソディ例会 (上石)
- 25日 今里送別会
- 30日 6期研修生アフナル氏来訪
- 30日 国際ソロプチミスト神戸チャリティバザー (上石)

4月

- 3日 PHD協会辞令交付式
- 4日 休眠口座学習会準備会 (坂西)
- 7日 35期研修生来日
- 8日 日本語復習ボランティア説明会 (前田)
- 9日 2017学年度米山奨学生・カウンセラーオリエンテーション (坂西、上石、前田、デフィ、ミスラ、タンタンミエ)
- 12-13日 アーユス春合宿参加 (八木)
- 14日 6期研修生アフナル氏帰国 (坂西)
- 15日 関西NGO協議会榎木氏送別会 (坂西)
- 16日 ミャンマー文化交流イベント (前田)
- 18日 職員研修 (講師榎木恵子氏)
- 19日 多文化共生セミナーのための国際理解・開発教育セミナー実行委員会 (上石)
- 19日 関西NGO協議会 理事会 (坂西)
- 22日 青年海外協力隊・シニア海外ボランティア春募集説明会 (上石)
- 24日 定例職員会議
- 25日 セーフトラベルセミナー (坂西、上石、八木)
- 26日 職員研修 (メタファシリテーション・講師中田豊一氏)
- 27日 NGO外務省定期協議会電話会議 (坂西)
- 27日 休眠口座学習会 (坂西)
- 27日 アジア生協協力基金・一般公募事業成果報告会 (八木)
- 27日 漫画家松田氏、研修生の似顔絵作成
- 28日 神戸市国際交流センター矢久氏来訪 (水野、坂西)

5月

- 6日 PHD協会35期生シェアリング
- 6日 NPO×ITデータマネジメント (坂西)
- 9日 NGO外務省定期協議会 全体会議 (坂西)
- 11日 JICA関西会議 (坂西)
- 13日 神戸YMCAオープンハウス (坂西、吉村、デフィ、ミスラ、タンタンミエ)
- 15日 PHD協会 内部監査 (坂西、上石)
- 18日 神戸市シルバーカレッジ 講義 (坂西、前田、デフィ、ミスラ、タンタンミエ)
- 19日 阪神シニアカレッジ (坂西、前田、吉村、デフィ、ミスラ、タンタンミエ)
- 23日 PHD協会 役職人事委員会 (坂西、上石)
- 23日 PHD協会 理事会 (坂西、八木、前田、上石、デフィ、ミスラ、タンタンミエ)
- 24日 篠山ロータリークラブ例会 (上石、前田、デフィ)
- 24日 関西NGO協議会 理事会 (坂西)
- 24日 NGO外務省連携推進委員会N環スカイ会議 (坂西)
- 25日 NGO外務省連携推進委員会事前会合 (坂西)

5月

- 26日 PHD協会 西脇指導者会 (坂西、前田、吉村、デフィ、ミスラ、タンタンミエ)
- 26日 川西ロータリークラブ例会 (上石、タンタンミエ)
- 27日 関西NGO協議会 総会 (坂西)
- 28日 青年海外協力隊兵庫県OB会 (坂西)
- 29日 コープともしびボランティア復興財団理事会 (坂西)
- 30日 ESD拡大運営委員会 (八木)
- 30日 定例職員会議
- 31日 小野加東ロータリークラブ例会 (上石、ミスラ)

6月

- 1日 神戸YMCA国際委員会 (坂西)
- 3日 35期来日報告会
- 5日 神戸NGO協議会 (坂西、上石)
- 5日 PHD協会財務委員会 (坂西)
- 6日 NGO外務省定期協議会 全体会議 (坂西)
- 7日 神戸YMCAちとせ幼稚園訪問 (坂西、前田、デフィ)
- 7日 篠山ロータリークラブ例会 (上石、デフィ)
- 11-12日 インドネシア出張 (坂西)
- 12日 PHD協会評議員会 (坂西、八木、前田、上石、デフィ、ミスラ、タンタンミエ)
- 13日 NGO-JICA協議会 コーディネーター会議 (坂西)
- 14日 NGO外務省連携推進委員会 事前会合 (坂西)
- 14日 ジョイラックデー バザー (八木、吉村)
- 14日 コープこうべ総代会 (坂西)
- 15日 NGO相談員近畿ブロック会議 (坂西)
- 16日 川西ロータリークラブ例会 (上石、タンタンミエ)
- 16-17日 NGOインターン・プログラム オリエンテーション (前田)
- 17日 スタディツアー合同説明会 NGO相談員ブース (坂西、八木)
- 18日 神戸インドネシア友の会イベント (前田、デフィ)
- 19日 羽曳野市立西浦小学校 交流会 (坂西、前田、デフィ)
- 21日 小野加東ロータリークラブ例会 (上石、ミスラ)
- 21日 NGO-JICA協議会 事前会合 (坂西)
- 21日 コープともしびボランティア復興財団 理事会 (坂西)
- 22-23日 平成29年度NGO相談員連絡会議 (坂西)
- 23日 JANIC若林事務局長来訪 (上石、八木)
- 26日 みんなのまなびや「国際交流ってしんどのい？」(坂西、前田、デフィ)
- 28日 JICA安全対策研修 (坂西)
- 29日 NGO外務省連携推進委員会 (坂西)
- 30日 定例職員会議
- 30日 神戸市民活動協議会 (HYOGON)総会 (坂西)

メタファシリテーション研修。途上国における支援先の人々へのアプローチ方法について、この分野の第一人者 中田豊一氏の研修を受ける。



京都 京北地区 あらい農園にて、有機農業について学ぶタンタンミエさんとミスラさん (左)



PHD News

国際協力大学生エッセイコンテスト2016

2016年度エッセイコンテストにて優秀賞を受賞した宮井彩生さんに、副賞としてタイ・スタディツアー往復航空券をプレゼントし、ツアーに参加していただきました！

彼女は、日本にいる時に捕らわれがちな「客観的な幸せ」（人から見た幸せ）に対し、タイで感じた充足感「主観的な幸せ」だと話してくれました。彼女のタイツアーのレポートの一部を抜粋してご紹介します。

「村での生活では衣食住がそろい、ベーシックヒューマンニーズが満たされていました。（中略）日本でのせわしない日々と比べ、たくさん眠り私らしく過ごし、私は幸せだと感じていました。ベーシックヒューマンニーズが満たされていることが主観的な幸せにつながるのではないかと思います。私は国際協力にずっと携わっていきたくて考えています。その時にこのベーシックヒューマンニーズを軸として考えると、よりhappyになれる支援ができるのではないかなと身をもって体感しました。」

宮井 彩生



2016年度タイ・ツアーでカレン民族の女性（中央）と記念写真に写るツアー参加者。右端が宮井彩生さん。

今後もPHD協会がエッセイコンテストを続けることで、将来ある大学生に学びの機会を提供し、国際協力に携わるきっかけにもらえたらと思います。

PHD 協会 国際協力エッセイコンテスト 2017

今年のテーマは「国際協力と〇〇のコラボ」

国際協力は多様化しています。

もしあなたなら、国際協力和何をコラボさせたいですか？

- ・募集期間 2017年5月15日～10月30日（必着）
- ・募集テーマ 「国際協力和〇〇のコラボ」
- ・対象 大学生
- ・応募規定 形式自由、1600字以内。応募作に氏名、題名、学校名、学年を明記。
- ・PHD賞1名 タイ・ツアー往復航空券（2018年2月ツアー実施予定）
- ・兵庫県婦人会館ユネスコ基金賞1名

内容はPHD賞と同様。対象は兵庫県もしくは兵庫県内の大学生限定。

・ご応募 お問い合わせ先 公益財団法人PHD協会「エッセイコンテスト2017」係

* 詳しくは当会ホームページをご覧ください。 <http://www.phd-kobe.org/ngoessey.html>



最近がんばっていること

○月×日のPHD協会

職員 八木 「婚活」がんばっています。何を？「それは秘密です。ただ言えることは今後も精進して『婚活道』を究めます。ライフワークとして」by八木。

職員 坂西 住宅ローンの返済。亡き父の真似をして毎月返済する毎に赤で塗りつぶすのがささやかな幸せ。さあ、あと28年…。完済できるか？

職員 上石 5月6月は、準認定ファンドレイザーという資格試験の勉強に奮闘。「PHDのファン度をレイズできるように頑張ります♥」合格なるか？

職員 前田 ショッピングセンターに並べられたカブトムシを見て飼いたいという衝動を我慢すること。15分悩むも、海外出張があるので諦める。

以上、かりゆしが似合わない順

BE KOBE

PHD協会は阪神・淡路大震災20年を機に生まれた「BE KOBE」の理念に賛同し、神戸を拠点とする団体として誇りを持って活動してまいります。

編集協力：桃骨